

Title	英国文化の構造序説
Sub Title	An introduction to cultural structure of Great Britain
Author	山岸, 健(Yamagishi, Takeshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1969
Jtitle	哲學 No.54 (1969. 11) ,p.193- 222
JaLC DOI	
Abstract	There are two main problems in this paper : 1. Some problems about cultural structure of Great Britain. 2. Cultural activities in communities. I may set next four frame of references for study of cultural structure and change. These are 'group', 'community', 'class and stratification', and 'generation'. Now I think it may be main tasks for sociology of culture to study structure, function, and change of culture in connection with society and personality. In Cultural Anthropology or Social Anthropology 'national character' is a key concept for comparative study of culture. But from the sociological points of view it seems to me a fundamental problem to study process of formation and structure of 'national culture'. In Britain we may find strong 'regionalism' : Scotch nationalism or Welsh. Then some problems of national culture are as follows : 1. Relation between use of language and formation of national culture. 2. Cultural contact and intercourse of many cultures. 3. Process of integration of local cultures. 4. Role of intellectual in their relation to national culture. Viewing from aspects of behavioral or explicit (overt) culture in Britain there are many cultural and social activities in communities. I may classify these activities into recreational, educational, charitable, social, and business or professional activities. Of these activities social and cultural (educational) activities of youth group or club are especially notable. So it is easy to find 'youth culture' in Britain. I think these many cultural and social activities are some aspects or elements of British national culture.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000054-0193

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英国文化の構造序説

山 岸 健

- 1 はじめに
- 2 英国文化の構造をめぐる諸問題
- 3 地域社会における文化活動
- 4 む す び

1 は じ め に

英国文化を考察するためには、いろいろな方法がある。英国の文学や美術を通じて英国文化の特質を考えることもできる。ターナー (J. M. W. Turner, 1775-1851) やコンスタブル (J. Constable, 1776-1837) の作品の中に英国を発見することは、決して難しくない。また、ラファエロ前派 (the Pre-Raphaelite) の制作活動や東イングンドの古都、ナーヴィッチを中心に栄えたナーヴィッチ派 (Norwich School) の絵画運動も多くの点で注目される。これらの点については、いずれ論じてみたい。

英国の都市や農村をまわってみると、そこにはほぼ共通した型を見出すことができる。形態上の型の共通性を考えてみると、ここにも英国文化の一断面があらわれる。また、地域社会の生活構造の諸側面においても、英国人の生活様式が認められる。この小論では、地域社会にみられる文化活動の一端について述べてみたい。さまざまな文化活動をおこなうために組織された団体の種類は、多方面にわたっている。これらの文化活動をみることにより、地域社会の生活の一面が明らかになる。英国人の社会生活において、これまでクラブの果たした意義は、みのがせないものである。英国人の日常生活を理解するためには、各種の団体や組織の活動を考慮する必要

があろう。英国文化の構造に関する考察をここではこの点にしばっておこない、他の諸問題については、稿を改めて述べることにする。

注 1) 形態上の型や生活構造に関しては、拙稿を参照のこと。

都市の生活と都市の構造、三田学会雑誌、第58巻11, 12合併号、昭和40年。
都市の構造論的考察、日本都市学会編、都市学の進展と地域理論、東京書店、昭和43年、所収。

2 英国文化の構造をめぐる諸問題

文化の社会学的研究をおこなう場合、集団、地域社会、階級および階層、世代を枠組として設け、これらの枠組との関係で文化の構造と変動を究明する方法もあろう。社会、文化、パーソナリティは、社会学における主要な問題領域であり、従って、文化の社会学的研究は、社会およびパーソナリティとの関連でおこなわれる。社会化の過程に注目しながら文化の研究が進められるのもそのためである。

ところで、国民性の研究は、これまで主として文化人類学者によっておこなわれ、社会学者によってもとりあげられてきた。これらの諸研究に認められる方法と問題点に関しては、ここでは触れず、別の機会に譲るが、社会学の視点で文化を研究する場合、特に焦点となる“国民文化”について二、三の問題点を指摘しておきたい。さきに集団、地域社会、階級および階層、世代を文化研究の枠組として挙げたが、これらの全体をおおうかたちでみられる国家や民族を考慮しながら、全体社会の構造を明らかにし、国民文化の形成過程とその構造を研究しなければならない。言語と教育制度は、国民文化を考える場合、最も重要な指標である。

集団との関係では、家族、近隣集団、遊戯集団、学校が、国民文化の形成過程で果す機能からみて注目される。地域社会との関係においては、都市の文化と農村の文化とが、どのようなかたちで交流し合い、国民文化の成立と存続にこれらの文化がどのような関係を有するかが問題となる。中

中央の文化と地方の文化がどのようなメカニズムによって国民文化に統合されているかという問題は、英国文化の構造を考える際には特に考慮すべきである。階級および階層との関係では、文化の階級差や階層差が国民文化の形成と構造にどのような影響を及ぼしているか、このような文化の差異はどのようにして生じるかなどが問題点となる。世代と文化に関しては、英国でも最近の研究が公刊されているが、国民文化と世代の文化の関係も注目される。¹⁾ 社会的カテゴリーたる世代が社会学の領域で次第に重要視されるにいたったのは、世代がさまざまな集団の成立と活動の基盤としても、また各種の文化運動の主体としても大きな役割を果たすようになったからである。²⁾

国民文化の形成と展開にあたり、知識人の果たした役割は、大衆との関連においても問題となる。ここでいう知識人には、詩人、小説家、画家、音楽家、建築家、科学者、思想家、宗教家、社会運動家、政治的エリートなどが含まれる。ズナニエッキ（F. Znaniecki, 1882-1957）は、国民文化と知識人の問題に関する重要な研究を残している。³⁾ ポーランド文化とポーランド国家に対する彼の所説には、傾聴すべき点が少なくない。

言語、教育、宗教と国民文化の関係とならび芸術活動が国民文化の形成にどのような影響を与えたかも考慮すべきである。英国社会の芸術活動では、演劇活動が国民文化の形成という点で特に注目される。シェークスピア（W. Shakespeare, 1564-1616）が英国文化の成立、特に国民文化の形成にいかに大きな寄与をなしたかは、いうまでもないことである。音楽、絵画、彫刻、建築、文学、詩、演劇などの芸術領域のそれぞれの場合について、国民文化の問題を考察すべきであろう。

集団、地域社会、階級および階層、世代と文化の関係をみるとそれぞれに各種の文化の差異が認められる。この文化の差異は、個人の思考様式、行動様式の差であり、これらの枠組で位置づけられる個人の思考および行動の様式は、社会化の過程で次第に多様な変化を示し、全体的文化のさま

ざまな下位文化が生まれる。下位文化 (sub culture) がどのようなメカニズムによって国民文化という全体的文化に統合されているか、これが問題となるわけである。国民文化は、国家の構造、国家の成立、国家の分割という政治的状况によっても変化する。全体社会の構造と国民文化の差異は、文化の比較研究における研究課題の一つである。複雑な民族構成のみられるソ連邦において、国民文化はどのようなかたちで成立しているか、複数言語の使用がみられるスイスで国民文化は果して形成されたか、同じく複数言語が使用されているベルギーでは国民文化は認められるか、こうした問題も注目される。

ところで、国民文化を考えるに際しては、神話、伝説、文化遺産、それに英雄や国家的事業の意義にも注意を払う必要がある。また、国民感情、民族意識の側面に眼を向けて、ナショナリズムの発展と国民文化の展開過程の関係を考察しなければならない。

英国では、今日でも“スコッチ・ナショナリズム”という言葉を目にする。タイムズ紙 (The Times) でも何度かスコッチ・ナショナリズムに関する記事が掲載されている。英国社会は、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドから構成される国家的統一によって成立しているとはいうものの、なお、それぞれの地域には、伝統的な独立の社会的背景のごときものが認められ、そのために、今日でもさまざまな問題が生じている。スコッチ・ナショナリズム運動は、その一端を象徴するものである。もう一つの例を挙げるなら、ウェールズ語の問題がある。国家的統一と国民文化の成立に対し、言語がどれほど大きな意味を有するかは、歴史の示すところである。イスラエル国家の建設と言語の関係を考えてみればよい。国語の形成と国民文化の成立とは、しばしば相ならんで認められたのであった。英国社会での言語問題のなかで最も注目されるのは、英語とウェールズ語の関係で、教育過程と言語という点からみても、このウェールズ語問題は、今日種々なる論議をよびおこしている⁴⁾。また、北アイルラン

ドにおける宗教問題も注目されている。リージョナリズムをめぐって英国社会には多くの問題が認められる。国民文化の統合と解体の両面を下位文化の体系の考察により考える意味があろう。スコットランドの文化、イングランドの文化、ウェールズの文化、北アイルランドの文化を下位文化の体系とみるなら、これら下位文化の相互関係が究明されなければならない。これら下位文化の成立には過去の政治的状況も大きな影響を及ぼしている。国民文化と国家の威信も一つの問題となる。英国文化の構造的特質として、リージョナリズムに基く下位文化の複合性を指摘しておきたい。

次に英国社会の構造を考える場合、しばしば強調される点であるが、階級および階層の問題を文化との関連でとらえてみよう。言語の階級差という点も注目される点である。生活様式、教育制度、職業選択の方向などにおいて階級差は、種々なる形式で認められ、社会化の過程も階級差や階層差によって異なるが、これらの差異も次第に変化してきている⁵⁾。大学制度にも新しい方向が生じてきている。全体社会の階級ないし階層の構造は、社会体制の歴史的変化によってさまざまな変化を示してきた。英国社会において今日どのようなかたちで階級ないし階層が存在し、それらが地域社会、集団、世代とどのような関係を有するかは、注目される点である。それでもなお、英国文化の構造的特質として、階級差、階層差に基く文化の重層性、文化の閉鎖性を指摘できるであろう。

国民文化の構造的部分には、常に伝統的文化と革新的文化とが含まれている。これら文化の創造、普及、受容においては、世代の対立が認められることもある。英国文化の構造をとらえるに際しては、それをただ伝統的固定的なものとみないで、革新的流動的なものとしても眺めなければならない。文化の構造を考える場合には、リントン (R. Linton, 1893-) の普遍的文化 (the Universals), 特殊的文化 (the Specialties), 任意的文化 (the Alternatives) の概念や文化人類学で論じられる文化型 (culture pattern) の概念、それに文化の焦点の概念 (cultural focus, M. J. Hers-

kovits) なども枠組となる。ソーロキン (P. A. Sorokin, 1889-1967) のイデオロギー的文化 (Ideological culture), 行動的文化 (Behavioral culture), 物質的文化 (Material culture) の概念も一つの枠組として注目される(第3図を参照)。世代は文化運動の担い手としてもみのがせない。十代の文化は、伝統的な英国文化との葛藤を経ながら、次第に英国の全体的文化の下位文化として全体的文化の体系に組み入れられる。世代の文化、特に若い世代の文化が英国文化の構造のどのような特質を生み出しているかは注目される点である。

集団と文化の枠においては、英国文化の構造を支えるものとして、家族、クラブ、それに教育制度を挙げてみたい。従来の英国文化の展開過程で各種のクラブを中心に成立した文化運動には注目すべきものが少なくない。今日、英国の都市や農村では、数多くの任意団体がみられ、それらの組織を中心として文化、スポーツ、奉仕、社交などの諸活動が営まれ、地方文化の振興のために多くの文化運動が展開している。このような団体での生活は、英国人の生活構造の重要な一部を形成している。地域社会の発展という点からみても、各種の機能集団の活動はみのがせない。

ところで、次に英国人の英国文化観についてスノー (C. P. Snow) とエリオット (T. S. Eliot) の例を挙げて、英国文化の構造を考えてみよう。スノーは人文的文化と科学的文化とを分類し、この二つの文化の間の断絶状況を述べる。人文的文化は、いわば、伝統的文化であり、また文学的文化である。文学的知識人がこの文化の担い手である。これら二つの文化の分離は西欧全体に存在するが、この分離は二つの理由により英国で特に極立っているという。その一つは、彼によれば、教育の専門化についての英国の狂信的といえるような信頼であり、他の一つは、“社会の形態を定めたものに固まらせる傾向が強い” ことである。文化の分離がひとたび始まると、社会のすべての力はそれを固まらせるように働き、その程度はますます進んで行くとスノーは述べている。⁶⁾

次にエリオットの所説を挙げてみる。彼は、衛星文化と強力文化という表現を用いるが、英国の場合には、スコットランド、ウェールズ、アイルランドの文化が衛星文化にあたり、英国文化は強力文化に相当するとみなされる。衛星文化は強力文化に対し少なからぬ影響を及ぼし、衛星文化の存続は強力文化にとって大きな価値を持つという⁷、彼によれば、文化とは、ある特色を持った考え方、感じ方、行動の仕方であり、国民文化とは無限の地方文化の総結果で、それらの地方文化は、さらに小さい地方文化から構成されている。一個の国民文化は、もしもそれが繁栄すべきものならば、諸々の文化が相寄って一つの星座を構成し、その各構成分子が互いに他を利することにより結局全体を利するような構造を有しなければならないとエリオットは述べている。

スノーの所説はすでに述べた伝統的なものと革新的なものとの関係でも考慮すべきであろう。英国の場合、教育制度と社会構造、さらに英国人の生活態度がこのような文化の分離状況と深く結びつくものと考えられるが、このような文化の分離状況は、たしかに今日英国のみならずいたるところで認められるだろう。二つの文化のぶつかり合うところで創造の機会は生まれるとスノーはみる。エリオットの英国文化観は、いわば、リージョナリズムに基く下位文化の複合性に積極的意味を与える立場である。ここでは、彼が地方文化の差異を認め、地方文化と国民文化の関連性に注目する点を英国文化の構造という観点からとりあげておきたい。

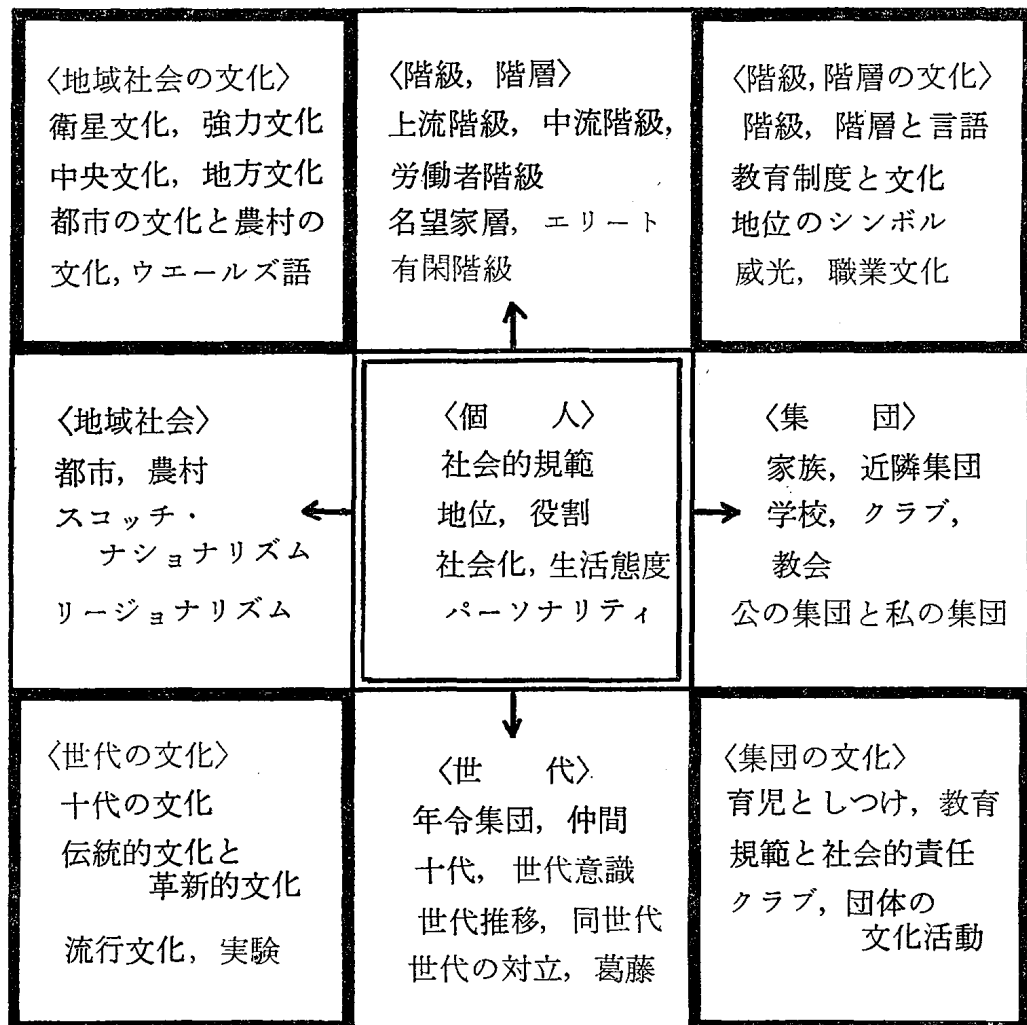
英国文化の創造、普及にあたりどのような階級や階層に所属する人々が中心的役割を演じたか、その場合、どのような集団、世代が注目されたか、また、地方と中央はどのような関係にあったかを考えてみなければならない。いわゆる名望家層は、英国文化の成立過程でどんな役割を演じたか、これは、文化の担い手、パトロンの問題としても注目されるものである。

これまで、ここでは、英国文化を完結して体系であるかのようにとらえてきたが、英国文化と外来文化の接触、交流を考慮しながら、英国文化の

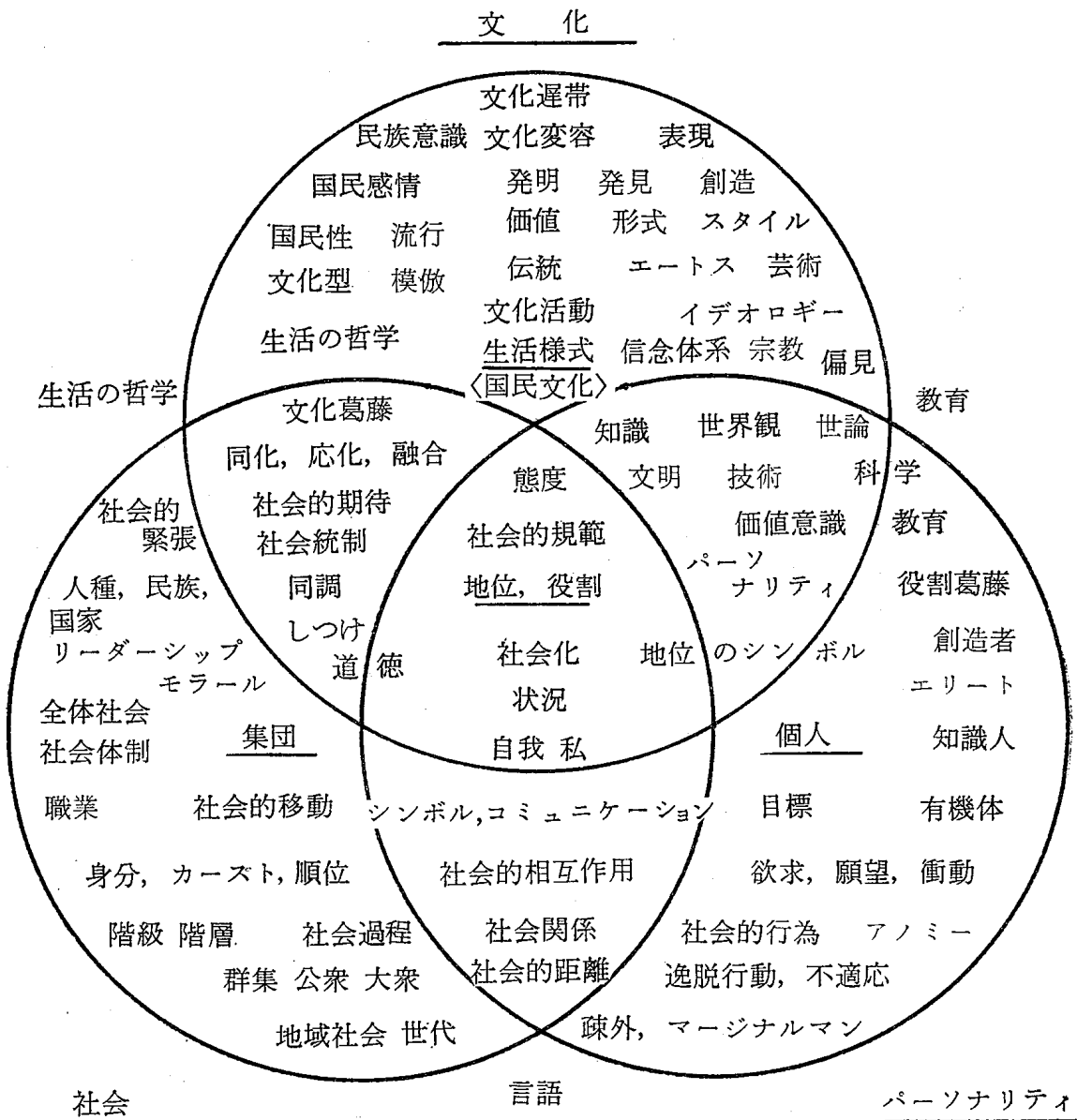
位置づけをおこなわなければならない。⁸⁾ ヨーロッパ文化の中での英国文化の位置づけを試み、また、米国文化と英国文化の関連性を考えたい（第6図を参照）。

以上が、英国文化の構造をめぐる諸問題であり、文化の社会学的研究の枠組の一案である。それを図示すると、第1図および第2図のようになる。社会学の視点で文化の比較研究をおこなう場合、最も基本的な概念は、国民文化の概念である。

第1図 社会、文化、個人の枠組



第 2 図 社会, 文化, パーソナリティ



注 1) C. Smith, Adolescence: An introduction to the problems of order and the opportunities of continuity presented by adolescence in Britain, London: Longmans, 1968.

F. Musgrove, Youth and Social Order, London: Routledge & Kegan Paul, 1964, Paperback 1968.

2) トインビー (A. Toynbee) は, 次のように述べている. "世代循環というものは物的な循環律でありながら, しかも物的生活におけると同じように精

神生活においても非常に重要なパターンなのである。”彼によれば、世代循環は、社会的変化の発動機であり、制動機でもある。引用は、トインビー、松本重治編訳、歴史の教訓、岩波書店、1957年、72頁。

- 3) F. Znaniecki, *Modern Nationalities: A Sociological Study*, Urbana: The Univ. of Illinois Press, 1952.
- 4) The Times, 1968. 1. 25, Welsh in Schools. これは論説であり、1月30日の同紙の投書欄にも同題の投書が寄せられた。いずれも学校教育とウェールズ語の問題である。
- 5) 階級および階層と文化の関連性に関する研究としては、次の研究が特に重要である。

T. H. Pear, *English Social Differences*, London: George Allen & Unwin, 1955. J. Klein, *Samples from English Cultures*, 2 vols, vol. 1: *Three Preliminary Studies, Aspects of Adult Life in England*, vol. 2: *Child-Rearing Practices*, London: Routledge & Kegan Paul, 1965.

アーノルド・トインビーは、階級差については次のように述べている（前掲書、邦訳164頁）。

“私がロンドンで子供だったころには、階級の差別がはっきりしていて、それが女の人の着ている衣服によって示されていた。私が大変ちいさかったころ、貴婦人とふつうの女の人との違いを発見したといって、私の母親を微苦笑させたことがある。貴婦人はボンネットという婦人帽をかぶっているが、ふつうの女の人帽子のかわりにショールを用いていると、私はいったのである。しかし、今日のイギリスにおいては、ロンドンにかぎらずその他のいかなる地方においても、女の人や子供の社会的地位をかれらが着ているものから推察することはできない。”

- 6) C. P. Snow, *The Two Cultures: And A Second Look*, Cambridge: Cambridge at the University Press, 1964（松井卷之助訳、二つの文化と科学革命、みすず書房、1967、邦訳27-28頁）
- 7) T. S. Eliot, *Notes towards the Definition of Culture*, London: Faber & Faber, 1948（深瀬基寛訳、文化とは何か、弘文堂書房、1967、邦訳76-77頁）
- 8) G. C. Homans, *Sentiments and Activities: Essays in Social Science*, London: Routledge & Kegan Paul, 1962.

同書所収の論文、11. The Frisians in East Anglia は、文化比較に関する

る歴史社会学的研究である。同書所収の次の二論文にも注目したい。

10. The Rural Sociology of Medieval England.

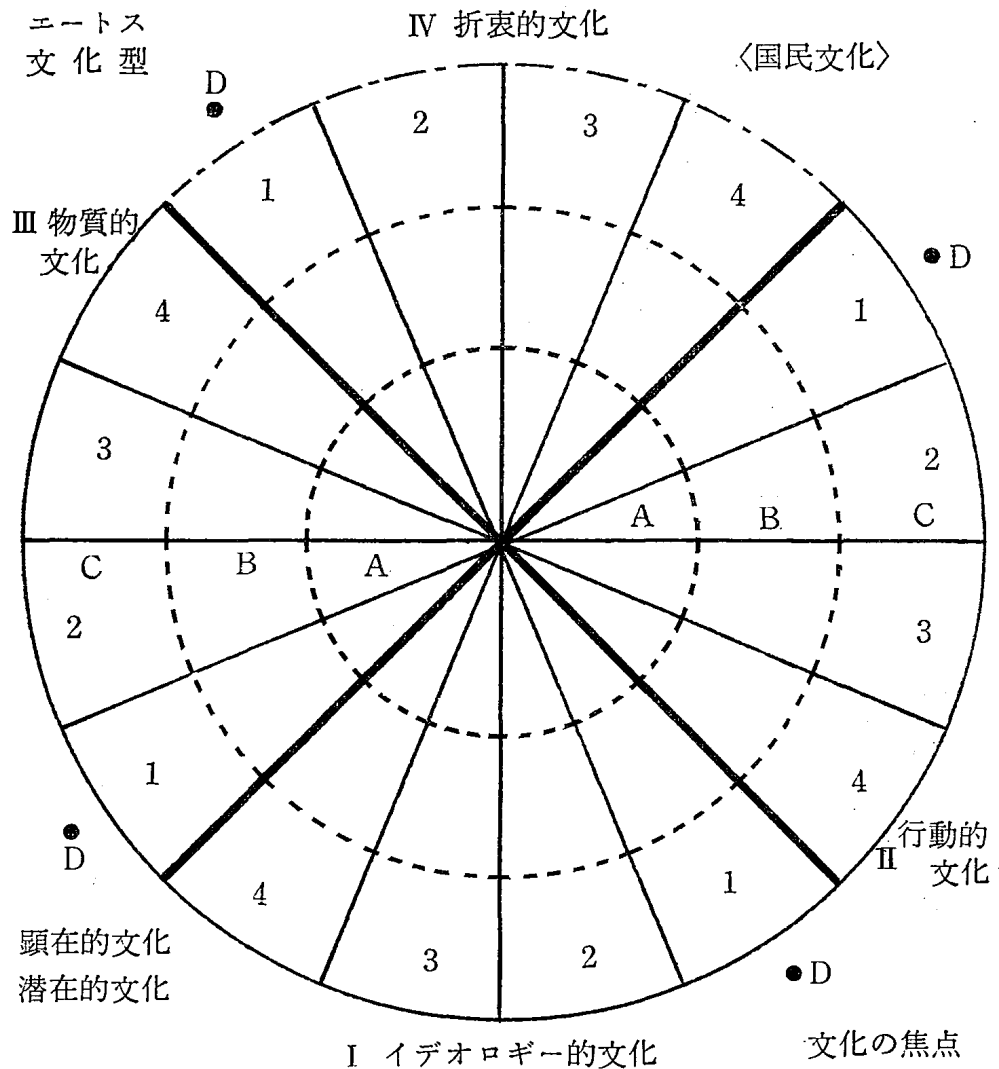
12. The Puritans and the Clothing Industry in England.

3 地域社会における文化活動

英国文化を考察する基本的枠組と英国文化の構造に関する諸問題を以上のようにまとめ、次に地域社会における文化活動の一端について考察したい。特にベリー・セントエドムンズ (Bury St. Edmunds)、ヨーク (York)、ウースター (Worcester) の三都市を例に挙げて、各種の団体の文化活動に触れてみよう。

ところで、前掲の第1図は、個人（パーソナリティ）を中心に位置づけ、その周辺に社会と文化を配置した図型で、集団、地域社会、階級および階層、世代に特有の文化をそれぞれコーナーに位置づけたものである。それらの文化との関係で特に注目される点は、四つの文化のブロックに記入されている。この図型には英国文化の構造的特質も考慮されて記入されているが、この図型は、社会、文化、個人（パーソナリティ）を中心とした一般的図型の一例でもある。社会、文化、パーソナリティの各領域に含まれる主要な基礎概念を考慮しながら、それをそれぞれの領域に配置し、社会、文化、パーソナリティの交叉する状況を図示した一例が、第二図である。この図型で説明できる範囲には、もちろん限度があり、これとは異った図型を描くこともできるが、今回は、社会、文化、パーソナリティの相互関係とそれぞれの構造を考慮し、国民文化の諸問題を考察する枠組として、このような図型をまとめてみた。比較的關係の深い概念を近接させて配置した。さらに普遍的文化、特殊的文化、任意的文化、個人的特性という枠とイデオロギー的文化、行動的文化、物質的文化という枠を考慮しながら、集団の文化、地域社会の文化、階級および階層の文化、世代の文化を位置づけた文化の構造図型が、第3図である。同心円の図型は、文化

第3図 文化の構造



- 1 集団の文化 2 地域社会の文化 3 階級、階層の文化 4 世代の文化
 A 普遍的文化 B 特殊的文化 C 任意的文化 D 個人的特性
 I イデオロギー的文化 II 行動的文化 III 物質的文化 IV 折衷的文化
 顕在的文化, 潜在的文化 文化的焦点 エートス 文化型

の受容のされ方、普及の範囲を基準として構成されたもので、時代や社会構造の異なるに応じて同心円の領域は動く。文化変動の過程をこの図型で考えてみることもできる。その場合、個人的特性（D）の位置とその意義にも注目すべきである。この第3図の図型のどの部分に地域社会の文化活動の各事例が位置づけられるかを考えてみることも意味があろう（第5図

参照)。国民文化は、この図に示されるような文化の構造を基本的骨組として構成されるものである。以上の三種の図型に密接な関連性が認められることは、いうまでもない。

ここで、英国の階級構造と社会経済的集団 (socio-economic groups) に関する分類例を、1951年のセンサスの場合についてみておきたい。このセンサスでは次の13の社会経済的集団が分類されている。

A.—Agricultural 1. Farmers. 2. Agricultural workers.

B.—Non-agricultural

(i) Non-manual 3. Higher administrative, professional and managerial (including large employers).

4. Intermediate administrative, professional and managerial (including teachers and salaried staff).

5. Shopkeepers and other small employers.

6. Clerical workers.

7. Shop assistants.

8. Personal service.

(ii) Manual 9. Foremen.

10. Skilled workers.

11. Semi-skilled workers.

12. Unskilled workers.

C.—Special groups not

included elsewhere13. Armed forces (other ranks).

以上の社会経済的集団を五つの社会階級に分けると次のようになる。

社会階級 1 3. Higher administrative, professional and managerial (including large employers).

社会階級 2 1. Farmers. 4. Intermediate administrative, professional and managerial (including teachers and

5. Shopkeepers and other small employers.

社会階級 3 6. Clerical workers. 7. Shop assistants. 8. Personal service. 9. Foremen. 10. Skilled workers.

社会階級 4 2. Agricultural Workers. 11. Semi-skilled workers.

社会階級 5 12. Unskilled workers. 13. Armed forces (other ranks).

1961年のセンサスでは、これらの13の社会経済的集団の分類は、16の分類に改められたが、ここでは触れない。以上の社会階級のとらえ方は、英国にみられる社会階級分類の一例として考慮しておきたい。

英国の都市および農村には、さまざまな機能集団がみられるが、なかでも任意に組織され、各種の文化活動を営むクラブや団体は、多方面にわたってみられるものである。ケントのエンズフォード (Eynsford) という村には村落協会 (The Village Society) があり、この組織は、次のような目的にそって活動している。

1. エンズフォードおよび周辺地域に関する関心と誇りを高め、村民 (citizenship) の意識を高揚する。2. この団体の力の範囲内で村の繁栄、保健、および一般的安寧を高めるために諸々の事柄をおこなう。3. 仕事の面での組織、文化的、教育的組織、スポーツの組織などの相互的協力と協同とを促進する。4. この地方の自然美を保護し、村および近隣地区の最上の建築上の特徴を保存する。5. 村の発展、建築、レイアウトに関して注意深い関心を維持する。この団体は、いわば、村の発展と安寧、文化財と自然の保護、各種のクラブの協力、協同を目標として組織されたものであり、1945年5月29日に第一回の集会が開かれた。この協会が中心となって毎年、スポーツの日の催しと子供達のクリスマスパーティが開かれているが、後者の集いは婦人協会 (the Women's Institute) との共催である。また村民の楽しみのためにダンスや映写会なども開かれ、1955年と1957年には絵画工芸展がこの協会の主催で開催された。The Village

Society の他にこの村で注目される団体には次のような例が挙げられる。

The Women's Institute, Toc H, The Boy Scouts, The Girl Guides, The Eynsford Players, The Allotment Holders' and Gardeners' Association. The Bellringers, The Cricket Club, The Football Club, The Working Men's Club

Toc H とは、一種の慈善的社会奉仕団体である。この村のボーイスカウトは、1908年以前に存在したが、公式に登録されたのは、1912年の10月24日とされる。The Girls Guides は、1927年に初めて組織された。The Eynsford Players は、演劇団体で、近年においては、村の公会堂 (the Village Hall) で毎年2回の上演をおこない、1950年の年末までに上演された作品は、23本を数えるにいたった。

英国の農村には、どの村にもエンスフォードでみられるような各種の団体がみられ、村民の文化的社会的活動の舞台となっている。H. E. Braceyによれば、第一次世界大戦後においては、多くの村の男性のクラブは、原則的には帰還した退役軍人 (Ex-Service men) によってつくられたという³⁾。今日でも、退役軍人の諸団体 (The British Legion, Ex-Service Organisations) は、都市農村を問わずに認められる。そのほか各種の娯楽や農業関係のクラブもみられるが、村落生活におけるクラブを考えるには、村のパブ (pubs) や宿屋 (inn) の意義もみのがせない。これらの施設は、各種のクラブの集会所ともなり、村落生活の拠点として村公会堂とならび大きな役目を果している。教区教会 (parish church) もこの点で村落生活のセンターとなっている。

W. M. Williams のモノグラフ (Gosforth の研究) をみると、村落生活の構造の中でクラブがどのように位置づけられるか理解される。彼はクラブと階級⁴⁾の関係を考察している。例えば、演劇団体 (dramatic association) に参加しているメンバーの所属階級は、上層上流階級、下層上流階級、上層中流階級、中流階級、下層中流階級の五階級で、上流階級と中流階級の

中間に位する中間階級 (intermediate) と最下層の下流階級のメンバーは、この団体に参加していないという。彼はこの村の階級を次の7階級に分類している。

Upper-Upper, Lower-Upper, Intermediate, Upper-Medial, Medial, Lower-Medial, Lower

この村のクラブの一例としては、テニス、フットボール、男女別のクリケットのクラブなどがあるが、保守党クラブ (Conservative club) の存在も注目される。このような政治的クラブは、他の地域でも存在している。

英国の都市にみられるクラブや団体の種類は、政治的、宗教的なものまで含めて、まことに多彩である。東イングランドの地方都市、ベリー・セントエドムンズ (Bury St. Edmunds) は、1961年のセンサスで 21,144 人、1963年なかばの推定人口、22,150人の小都市であるが、ここには、次のような種類の諸団体が存在する。

Sport, Recreational, Educational, Ex-Servicemen's Association, Charitable, Entertainment / Social, Youth, Business and Professional.

アルファベット順に団体の一例を挙げよう。

Suffolk Institute of Archaeology, Bury St. Edmund (以下 B.S.E. と略す) Art Society, The Athenaeum Club, B.S.E. Bach Society, B.S.E. Badminton Club, St. Edmundsbury Bowls Club, Boxing Club, East Anglian Brass Band Association, British Railway Staff Association, B.S.E. Business & Professional Women's Club, St. Edmundsbury Camera Club, B.S.E. & West Suffolk Chess Club, Bury & West Suffolk Branch-United Commercial Travellers Association, B.S.E. Constitutional Club, B.S.E. Cricket Club. National Deaf Children's Society (Suffolk Region), B.S.E. & District Far East Prisoners of War Club, B.S.E. Farmer's Club, B.S.E. Film Society, B.S.E. Flower Club, B.S.E. Model Railway Club, West Suffolk County Nursing Association, B.S.E. Operatic & Dramatic Society,

St. Edmundsbury Symphony Orchestra, The Religious Society of Friends (Quakers), B.S.E. Group of Radio Amateur, Rotary International, B.S.E. Townswomen's Afternoon Guild, Women's Home League (Salvation Army), Workers Educational Association, B.S.E. Young Conservatives, B.S.E. & District Young Farmer's Club, Y.M.C.A., West Suffolk Association of Youth Clubs, West Suffolk Youth Orchestra.

スポーツ関係の諸団体としては、次のような種類の団体がみられる。

Archery, Athletic, Beach Casters, Rugby, Football, Cricket, Bowls, Tennis, Netball, Swimming, Wheelers Cycle, Motor Cycle, Home Guard Rifle, Hunting, Roller Skating.

これらの各種目にわたり多数の団体が活動している。レクリエーション関係の団体としては、次のような例もみられる。

Cribbage League, West Suffolk Horticultural Society, Cage Bird Society, Canine Society, Dog Training Society, Railway Enthusiasts Club.

このように各種の遊戯、芸術、動植物などの趣味の団体が存在する。教育的団体には、考古学、歴史、自然科学などの例が含まれる。また退役軍人の組織としては、次のような団体がある。

British Legion, R.A.S.C. Association, R.A.F.A. Association, Dunkirk Veteran's Association, Far East Prisoner's of War Club.

慈善団体には次のようなものがある。

British Red Cross, St. John Ambulance Association, Women's Voluntary Service, Friends of the Bury St. Edmunds Hospitals, Toc H, Diabetic Club, Suffolk Mission to the Deaf and Dumb, Royal National Life-boat Institution, Guide Dogs for the Blind Association, West Suffolk Society for Mentally Handicapped Children.

これらの団体には、身体障害者関係の組織も含まれている。娯楽、社交

関係の例には、演劇、オペラ、シンフォニー、ブラスバンド、合唱、舞踊、映画 (Amateur Cine Society) などがみられる。社交団体たる Athenaeum Club と Caledonian Society の存在も注目される。後者は、スコットランドの団体である。また、West Suffolk Scottish Dance Club もある。若者の組織としては、次の諸団体がある。

Boy Scouts Association, Girl Guides Association, Bury St. Edmunds' Youth Club, West Suffolk Association of Youth Clubs, Army Cadet Corps, Sea Cadet Corps, Air Training Corps, Y.M.C.A. & Y.W.C.A., Youth for Christ, Youth Orchestra, Girls' Guildry.

これらの団体の中には、全国的な規模の組織もある。ケントのエンズフォード村にも Boy Scouts と Girl Guides の組織がみられた。最後に職業関係 (Business & Professional) の団体の例を挙げよう。

Round Table, No. 289, Rotary Club, Ladies' Circle, Inner Wheel Club, Farmers' Club, Womens' Gas Federation, '41' Club of Round Table.....

これら各種の団体の集会は、さまざまな施設を使用して開かれるが、Athenaeum club のように専用の施設を有する例もある。このクラブは週日朝9時から夜9時30分まで開かれ、年間会費は個人で2ポンド2シリング、家族会費は3ポンド3シリングである。Flower club の会合は、毎月第一金曜日にギルド・ホールで開かれ年会費は1ポンドである。ホテルや学校を集会の場所とするクラブもみられる。クラブの会合は週何回、月何回と決められており、いずれのクラブも特殊の職業や資格を必要とするものを除いては、加入の自由が認められている。ベリー・セントエドムンズの以上のような文化活動とその諸団体とを一覧すると、男女の性別や世代という社会的カテゴリーに基いて結成された団体が決して少なくないことに気づくが、特に若い世代のメンバーによって組織された団体やクラブの活動は注目される。これは、他の地域の場合も指摘されることである。ま

た、全国的組織の下部組織となっている団体と地方的団体、公共的性格の団体と私的性格の団体、芸術的団体、運動のための団体などの種類を考えてみることもできる。ベリー・セントエドムズはサフォークの中心都市の一つなので、地方文化のセンターたる特徴もこれらの団体に見出されるわけである。

ところで、ヨークは、英国の代表的な中世都市として知られているが、この都市に存在する団体をヨーク市立図書館のクラブ登録台帳の分類に基づいて列挙すると次のとおりとなる（数字は団体数を示す）。ヨークの 1967 年 6 月現在の推定人口は、105,550 人である。ベリー・セントエドムンズの団体と比較するとその種類も多く、団体数もはるかに多い。ベリー・セントエドムンズの団体数は、148 団体であった（1968 年 3 月現在）。

Cultural and Recreational Activities in York

Agricultural	13	Political	12
Allotments	6	Religious	29
Alumni	10	Service	31
Animals	20	Social	31
Dramatic	11	Sport	151
Educational	9	Trade Professional	65
Guilds	8	Trade Unions	41
Hobbies+Pastimes	50	Welfare	46
International Relations	16	Women	45
Learned	21	Youth	30
Medical	24	Miscellaneous	24
Musical	41	total	734

(1968.8)

次に各種の団体の例を若干挙げてみる。

Agricultural: Yorkshire agricultural adventurers, Yorkshire country landowners association, York district young farmers' club,

York association of beef shorthorn Breeders.....

Allotments: York district allotments & gardens associations executive, Clifton & Rawcliffe Gardeners association.....

Alumni: Cambridge Society of York, Oxford Society, Queen Anne old girls association.....

Animal: York beefkeepers association, Yorkshire beefkeepers association, York canine association.....

Dramatic: York amateurs operatical & dramatic society, York railway institute players, Theatre club.....

Educational: Shakespeare reading club, York economic society

Guild: York Guild of Building, The Company of Butchers of York, Merchant adventurers company, Guild of weavers, Spinners & dyers, Merchant of the staple of England.....

Hobbies & Pastimes: York arts society, York Bridge club, York chess club, York film society, York flower club, Castle railway circle, York poetry group, York travel society, Association of Yorkshire bookmen.....

International: English speaking union, Circolo Italiano, Anglo-Rhodesian society, United Nations association, York Vietnam group, York Esperantists, York Anglo-Scandinavian society, Buddhist society.....

Learned: York Mathematical association, York & East-Yorkshire Architectural society, Yorkshire Archaeological society, Yorkshire Geological society.

Medical: British medical association, British Red Cross society, Deaf & dumb benevolent society, York medical society.....

Musical: Chamber music club, York madrigal singers, York symphony orchestra, Athenaeum Ladies choir.....

Political: York communist party, York conservative association, York young conservatives, York young socialists, York & district Fabian society, York labour party, York liberal party.

Religious: British & Foreign Bible society, Friends of York Minster, York inter church youth group.....

Service: British Legion, Royal Air Force association.....

Social: Anglo-American families association, Canada, Australia, Newzealand, United States Parents association, York coffee pot club, York Lions club, York Rotary club.....

Sport: Cricket, Foot ball, Tennis, Riding, Rugby.....

(以下省略)

スポーツは、ほとんどあらゆる範囲にわたり、多彩な活動が展開している。これらの諸団体の中で特に注目されるのは、国際的視野に立つ団体の存在であろう。また、同窓会の組織もみのがせない。政治的団体は、どの地域社会においても存在している。スポーツ、趣味、娯楽の諸活動の巾の広さを考えると、地域社会の文化活動の輪郭が浮び上ってくる。ヨークの団体を類別するなら、趣味・娯楽、職業・労働、政治・国際関係、宗教、婦人・青少年、教育・学術、社交・奉仕のカテゴリーを設けることができる。

ところで、バーミンガムに近い中部イングランドの都市、ウースター(Worcester, 人口 69,390) の団体をみると、ヨークにみられるようなカテゴリーに従って各種の組織が存在する。スポーツ、文化の諸団体の範囲も広い。全国的組織の下部機構をなす団体は、British Legion, British Red Cross Society, それに政党および各種の労働組合の下部団体ないし支部である。その他特色ある団体の例を示せば次のようになる。

Catholic Women's League (Worcester Section), Church of England Children's Society, City Club, City of Worcester Literary Society, Dairyman's Association (National) Worcester and District Branch, Friends of Worcester Chathedral, Ladies' Hockey Club, Old Age Pensioners' Association, Worcester and District, Old Elizabethans' Association, Scots Society, Worcester, Toc H., Worcester City Branch, Welsh Society, Worcester, Worcester Central Towns-

women's Guild, Worcester Junior Theatre Club, Worcester Society of Artists.

この中で特に注目したいのは、スコットランドとウェールズの団体の存在と若年者の組織である。ウースターの団体のうち青少年の団体をみると次のとおりである。

City of Worcester Youth Organisations

A Youth Organisations	11. Miscellaneous	4
1. Church Youth Club 15	total	39
2. Christian Endeavour 2		
3. Crusaders 2	B Brigade	2
4. Christian Association 2	C Girl Guides	23
5. Pathfinders 3	D Boy Scouts	10
6. Age Group 7	E Army Cadet Force	2
7. Junior Theatre Club 1	F Air Training Corps	1
8. Motor Cycle Club 1	G Sea Cadets	1
9. Young Farmers' Club 1	H British Red Cross Society	7
10. Salvation Army 1	(Seniors & Juniors)	

この中で、1, 2, 3 は、いずれも教会を本拠とする組織であり、4 は、男女別に組織され、Young Men's Christian Association は、Y.M.C.A. の関連組織である。農業従事者の組織も存在するが、これはベリー・セントエドムンズやヨークにもみられたものである。軍関係の青少年組織 (E, F, G) も存在するが、ガール・ガイド、ボーイ・スカウトの両組織の普及と英国赤十字社の下部組織の存在は、特に注目される。ウースターの市教育委員会では、青少年団体の設立とその活動に積極的な姿勢を示している。このような英国の諸都市にみられる青少年団体の活動を考えることにより、社会的カテゴリーたる世代の意義をあらためてふりかえてみたい。世代はたんに社会的カテゴリーにとどまるのではなく、世代を基礎とした

文化活動の現況を考えるならば、それは、集団、地域社会、階級および階層と相対して位置づけられるものというべきであろう。

- 注 1) これら三都市およびエンスフォード村の文化活動と諸団体の現況については、各地の要覧 (official guide book) を参照し、筆者自身の現地図書館における調査によってまとめたものである。
- 2) D. C. Marsh, *The changing Social Structure of England and Wales 1871-1961*, London: Routledge & Kegan Paul, 1958, revised edition 1965, p. 199.
- 3) H. E. Bracey, *English Rural Life: Village Activities, Organisations and Institutions*, London: Routledge & Kegan Paul, 1959, pp. 158-159.
- 4) W. M. Williams, *The Sociology of an English Village: Gosforth*, London: Routledge & Kegan Paul, 1956, third impression 1964, pp. 122-126.

4 む す び

かつて、トクヴィル (Alexis de Tocqueville, 1805-1859) は、米国では多数の結社 (association) が種々なる目的に応じてつくられ活発に活動しているのに対し、英国では結社の原理は、決してそれほどしばしばまたそれほど巧みに使用されなかったと述べている。彼によれば、英国人は、しばしば大事を単独で遂行するのに米国人はささいな事のために結社をつくるという。だから、英国人は、結社を行為の強力な手段とみるが、米国人はそれを行為の常套手段とみなしているようだと述べる¹⁾。

これはトクヴィル自身の見聞に基く意見であるが、仲々興味深い点がみられる。今日、英国の都市や農村には多数のクラブや団体が存在し、各方面にわたり活発な活動を展開している。その種類は、スポーツ、趣味・娯楽、職業・労働、政治・国際関係、宗教、婦人・青少年、教育・学術、社交・奉仕のカテゴリーにわけられる。これらのクラブや団体の活動には、公共的性格と私的性格も認められるし、組織系列の形態によっては、国家

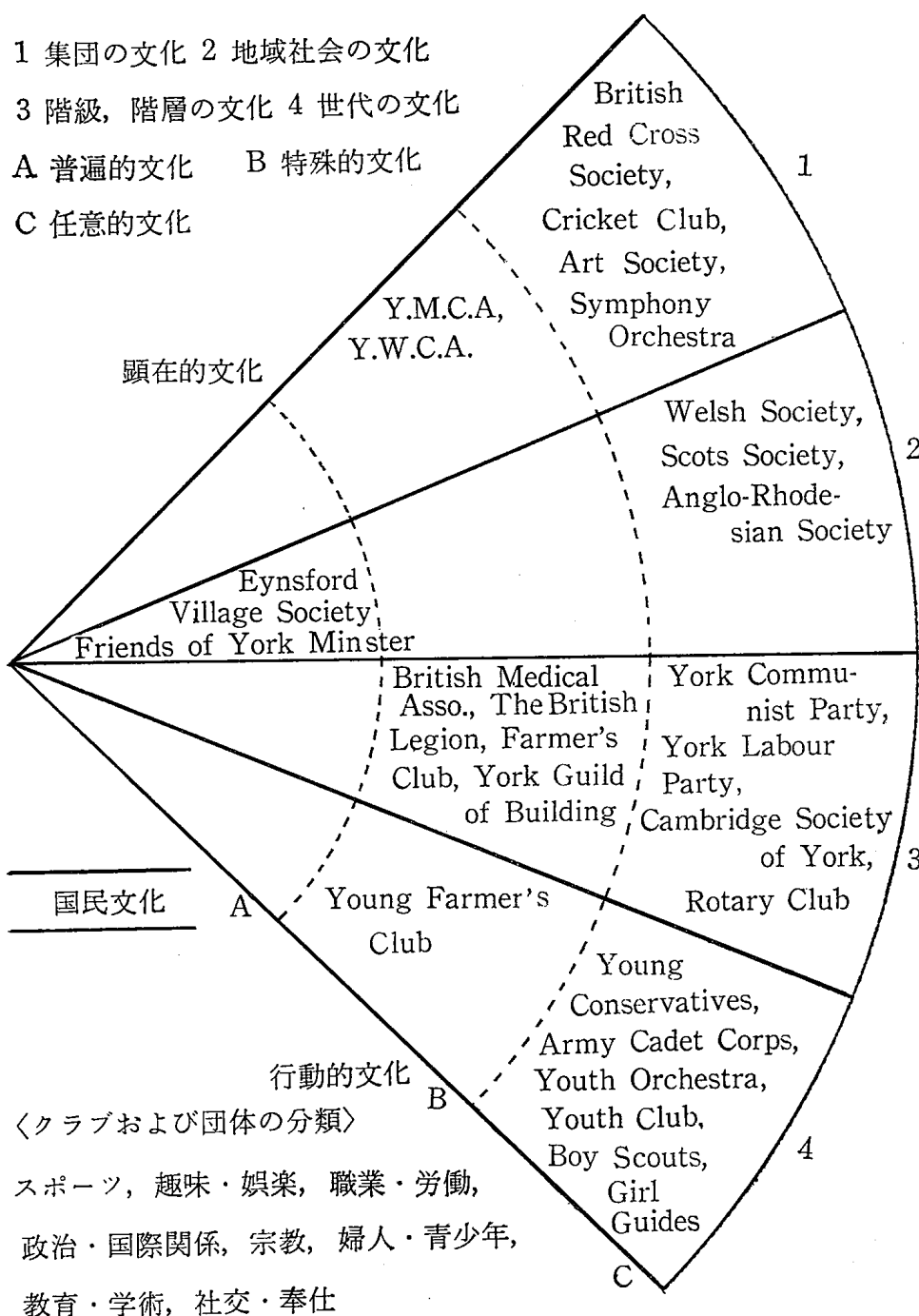
的、国際的規模の団体と地方団体との差異も見出される。集団、地域社会、階級および階層、世代を枠組としてこれら諸団体の位置づけを試みることもできるが、諸団体は、通常、複数の枠組と交叉する関係にある。例えば、ライオンズ・クラブやロータリー・クラブを第4図では階級・階層／国家的国際的という欄に入れてあるが、これらの団体をその成員の世代構成という点からとらえることも意味があり、また、地域・地域社会にみられる多数の団体の中でのこれらの団体の位置づけをおこない、地域生活に与えるこれら団体の影響を考える必要もあろう。ただ、ライオンズ・クラブやロータリー・クラブの性格を考えるなら、階級・階層との関連性においてこれらの団体の活動とその位置づけを試みることも有効とみなされよう。第4図は、以上のような背景を考慮しつつ作成されたものである。

集団、地域社会、階級・階層、世代の枠組と普遍的文化、特殊的文化、任意的文化の基準に従って団体を配置した試みが、第5図である。家族や学校、それに近隣集団にみられる生活様式と諸活動は、普遍的文化の領域と深い関係を有するが、ここでとりあげた団体の多くは、特殊的文化、任意的文化の領域と関連する例が多い。それは、団体の目的、組織からみて当然といえよう。国民文化は、普遍的、特殊的、任意的各文化領域を全体的にとらえて浮び上るものなので、地域社会にみられる諸団体の活動は、それぞれなんらかのかたちで国民文化の構造に組み入れられている（第2図、第3図も参照）。別な形式で、国民文化をめぐる基本的概念とそれらの関係をあらわしたものが、第6図である。国民文化の構造を考える際には、この図の上段の諸概念の検討を迫られるが、国民文化の成立過程を考える場合には、下段の基礎概念をも合せて考慮しなければならない。国民文化の成立と構造は、教育、言語、社会化の点でも、全体的文化の下位文化たる地方文化（衛星文化）と国民文化の関係においても問題となるが、外来文化と自国文化という角度からも考察される。第6図中央の図型は、英国文化と他の諸国、諸地域との交流の関係を示すものである。英国の国民文

第 4 図 クラブ、団体の分類

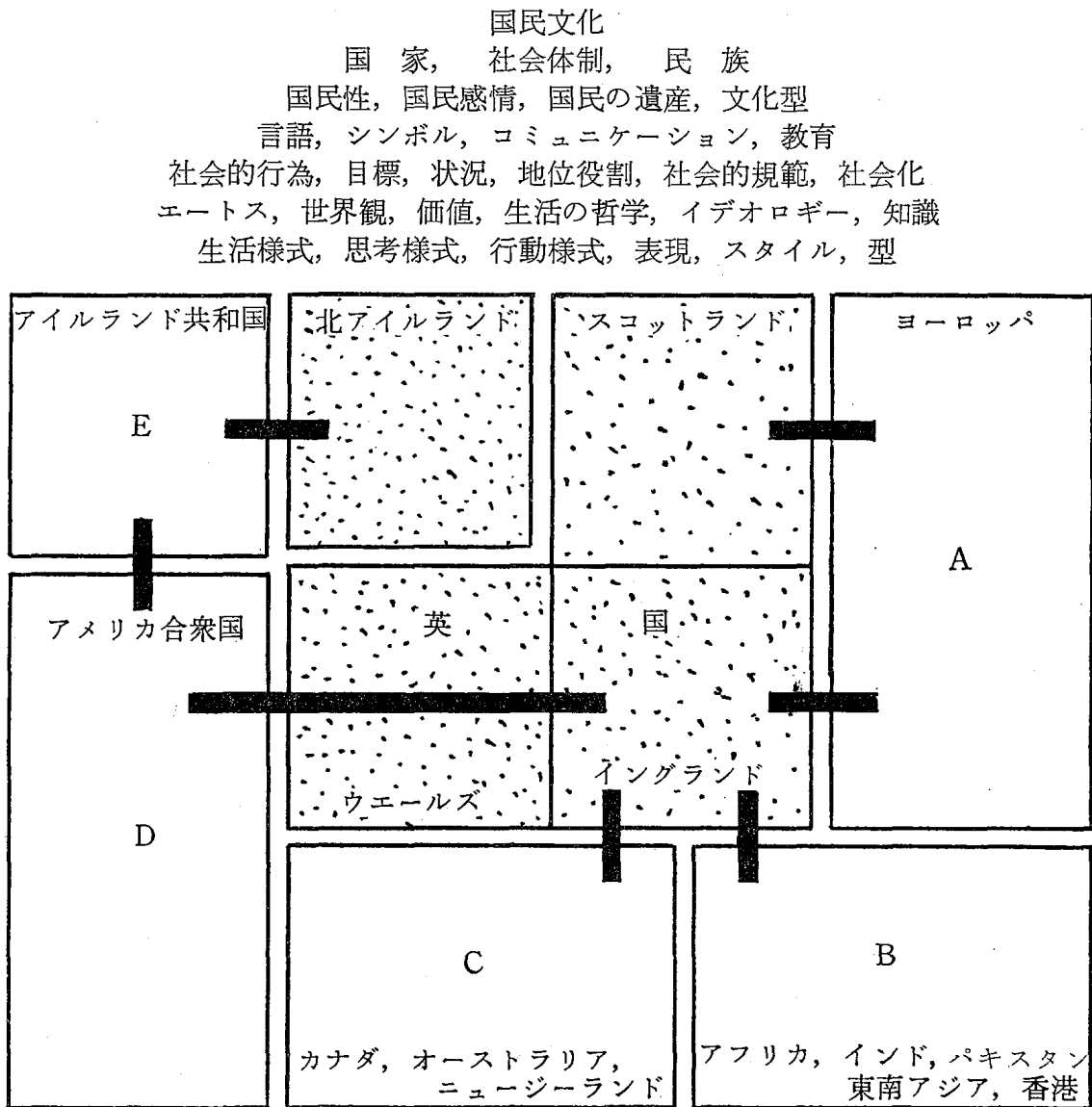
	National & International	Local
Class & Stratification	Lions Club, Rotary Club, Toc H., British Medical Asso., Ex-Service Organisation, The British Legion, Trade Union, York Communist Party, York Labour Party	Allotment Holders & Gardeners, Working Men's Club, British Railway Staff Asso., York Guild of Building, York Medical Society, Cambridge Society of York, Oxford Society, Farmers Club
Generation	Young Conservatives, Army Cadet Corps, Sea Cadet Corps, Air Training Corps	Young Farmer's Club, Youth Orchestra, Youth for Christ, York Inter Church Youth Group, Youth Club, B.S.E. & District Far East Prisoners of War Club, Dunkirk Veterans Asso., Old Age Pensioners' Asso.
Male & Female	Y.M.C.A. Y.W.C.A. Catholic Women's League (Worcester Section)	B.S.E. Business & Professional Women's Club, West Suffolk County Nursing Association, B.S.E. Towns Women's Afternoon Guild, Women's Home League (Salvation Army)
Region & Community	Caledonian Society (B.S.E.), Welsh Society, Scots Society, English Speaking Union, Anglo-Rhodesian Society, York Vietnam Group, Anglo-American Families Asso., Canada, Australia, Newzealand and United States Parents Asso.	Eynsford Village Society, Suffolk Institutes of Archaeology, Friends of York Minster, Friends of Worcester Cathedral, Worcester City Club
Other Groups	British Red Cross Society, National Deaf Children's Society (Suffolk Region), National Dairy Man's Asso. (Worcester & District Branch)	<div> Cricket Club Badminton Club Football Club Riding Club Rugby Club </div> } Sport <div> Art Society Bach Society Shakespeare Reading Club, Opera & Dramatic Society, Symphony Orchestra </div> } Cultural

第 5 図 文化の構造と団体の活動



化をとらえるのに諸国の文化から英国文化の受けた影響と英国文化が他の地域に与えた影響とを合せて考えなければならない。この図型のような観
点に立って英国文化の構造が論じられる。B, C, E の範囲は、英国文化圏

第 6 図 国民文化の構造



文化の接触, 交流, 伝播, 受容, 普及, 浸透
 文化中心, 文化領域 発明, 発見, 創造
 同化, 応化, 融合, 文化変容, 文化変動

文化と文明

に含まれる地域であるとみることにもできるが、英国とこれら地域の関係は時代によって変化した。アフリカ、東南アジアとあるのは、旧英領の地域をさす。また、カナダと英国の文化面での交流は注目されるが、カナダ文化の構造を考えるに際しては、フランス文化の影響もみのがせない。国民文化の成立と構造は、国家建設という事実との関連でも論じられる。この

ように国民文化の問題は、国家、民族と深く結びつくが、このことは、国民文化の構造が政治の領域と切り離されないことを示している。

ヨークのスポーツ団体の中では、クリケット関係の団体が最も多数を占めている。演劇関係の団体も、いずれの地域でもみられた。文化活動の領域は、多岐にわたる。青少年関係の団体活動は、各地で顕著なものがあり、“若者の文化”(Youth culture)の問題は、今日特に注目される。

マーガレット・ミード(M. Mead)も英国文化を考察する場合、スコットランド問題などに触れているが、²⁾英国文化におけるリージョナリズムとその文化は、最も重要な問題点である。本稿では主として行動的文化の観点から地域社会にみられるクラブ、団体とそれらの文化活動の領域に焦点をしばり、英国文化の一断面を示しながら、英国文化の構造の研究の枠組と問題点を指摘し、合わせて国民文化の諸側面を考察した。英国人および外国人が、英国文化をどのようにとらえたかという英国観を検討することも英国文化の構造を究明する一方法となる。この点については、稿を改めて考えたい。今回は最後にマックス・ウェーバー(M. Weber)の英国観の一部を挙げておこう。

“17世紀以来、「旧い愉しいイギリス」(《fröhlichen alten England》)の代表者たる「貴族地主層」(《Squirearchie》)と、社会的勢力のいちじるしい変転はあるがピューリタン諸層との軋轢は、イギリス社会の全体を縦につらぬいてみられる。二つの性格、すなわち、ありのままの素朴な人生の喜びを味わおうとする性格と、厳密な規律と自制によって自己を支配し、形式的な倫理的規制に身を委ねようとする性格とは、イギリスの「国民性」(《Volkscharakters》)の映像のうちに今日もなお並立している。³⁾”

この一節にも彼自身の基本的姿勢がよく現われている。国民性や国民文化に対する彼の関心が、決して少ないものでなかったことは、ウェーバーの研究の示すところである。(1969年8月7日稿)

- 注 1) ed. by R. M. Hutchins & M. J. Adler, Gateway to the Great Books, 6 Man and Society, London & Chicago: Encyclopaedia Britannica, 1963, 所収, A. de Tocqueville, Observation on American Life and Government, from Democracy in America, p. 668.
- 2) Anthropology Today, prepared by A. L. Croeber, Chicago: The Univ. of Chicago Press, 1953, 所収 M. Mead, National Character, pp. 649-650.
- 3) Max Weber, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I, Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), 1963, 所収, Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, p. 194, (邦訳, 梶山力, 大塚久雄訳, プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神, 下巻, 岩波文庫, 1962, 226 頁)

〔附記〕 本稿は、福沢諭吉記念慶応義塾学事振興基金による研究の一部である。筆者は、英国滞在中多くの方々から暖い援助をたまわった。本稿を、R. P. ドーア教授に捧げたいと思う。

An Introduction to Cultural Structure of Great Britain

Takeshi Yamagishi

Résumé

There are two main problems in this paper: 1. Some problems about cultural structure of Great Britain. 2. Cultural activities in communities.

I may set next four frame of references for study of cultural structure and change. These are 'group', 'community', 'class and stratification', and 'generation'. Now I think it may be main tasks for sociology of culture to study structure, function, and change of culture in connection with society and personality.

In Cultural Anthropology or Social Anthropology 'national character' is a key concept for comparative study of culture. But from

the sociological points of view it seems to me a fundamental problem to study process of formation and structure of 'national culture'.

In Britain we may find strong 'regionalism': Scotch nationalism or Welsh. Then some problems of national culture are as follows:

1. Relation between use of language and formation of national culture.
2. Cultural contact and intercourse of many cultures.
3. Process of integration of local cultures.
4. Role of intellectual in their relation to national culture.

Viewing from aspects of behavioral or explicit (overt) culture in Britain there are many cultural and social activities in communities. I may classify these activities into recreational, educational, charitable, social, and business or professional activities. Of these activities social and cultural (educational) activities of youth group or club are especially notable. So it is easy to find 'youth culture' in Britain.

I think these many cultural and social activities are some aspects or elements of British national culture.